2022 年度 「共同研究事業」活動報告書

すべての子ども達が「分かる」「できる」授業の発展
～「多様な性・生き方」の学びから自他尊重の関わりを築く～

和歌山大学教育学部附属特別支援学校　鶴岡尚子
和歌山県立和歌山さくら支援学校　土井一真
和歌山大学教育学部　本村めぐみ（研究代表者）

1．本研究のねらい

本研究は、昨年度から２年目となる継続研究である。本年度も、引き続き「ダイバーシティ＆インクルージョン教育」の理念に基づき、あらゆる学び手が「多様な性・生き方」を「理解できる（実践できる）」ことを基盤に、自身の様々な生き方の可能性に向けた自己洞察に繋げ「自他尊重の関係性を築き得る（できる）」ことを目指した授業づくりがいかなるものかを、さらに発展的に模索することを目的とした。

昨年度では、特に軽度発達障害を持つ和歌山大学附属支援学校の中学部の生徒たちと、海南高等学校定時制に通う高校生らを教育実践の対象に位置付けたことによって、明確な課題が抽出された。

具体的には、特に附属支援学校においては発達段階に見合うイラスト教材や、啓蒙動画などを小分けにしながら丁寧に解説することによって、「性的少数者がこの社会には存在する」という知識導入と、彼らが「へんではない」という一定の理解には至ることが出来た一方で、自分たちが過ごす学校やクラスのなかにも彼らは存在する可能性について、発展的な思考の拡大には導けなかったことが課題として指摘された。

また、定時制高校においては、単発的な人権学習の機会に限られたために、本研究のねらいである「多様な性・生き方の学び」から、以後、いかに自他尊重の関わりづくりへと成熟し得たかを評価するには至らなかったことが課題とされた。

本年度は、昨年度の実践から見出された課題を乗り越える方法や、＜よりユニバーサルな授業づくり＞を目指すための要件を模索するという目的により、和歌山大学教育学部における新規開設科目「家族を考える」（全 15 回）における授業づくりに注目した。将来は教師として「多様な性や生き方」の学びを教育現場において提供する立場にある大学１～３年生の学びの軌跡を丁寧に観察し、その成果から前述した昨年度の課題克服のための手立てを、共同研究として考察することとした。

２．本研究の対象となった授業について

本研究の対象となった「家族を考える」という授業は 2022 年度より本研究代表者により新規に開設された科目である。全 15 回に渡る授業内では「現代家族の多様性を考える」ことの一環として、5 回分の授業を「SOGIE（Sexual Orientation　Gender Identity Gender Expression）」の理解及び、とくに SOGIE の中でも少数派とされる「LGBTQs の人々と家族関係」を考えるための実践に費やした。

なお、本授業の受講者は全 22 名であり、１～4 年生によって構成されていた。名簿上の性別は男性 8 人、女性 13 人であった。半年を通して、互いを知り合いながら自他尊重の関わりを築くには大規模すぎない、理想的なサイズであったと推察する。

３．授業実践における工夫について

本授業では、昨年度の課題を乗り越えるために、SOGIE の多様性については、授業のクラスメイトという「隣人」への関心を通して理解が深まること、その理解を伴った自己洞察、他者理解が促されるように複数の工夫をこらした。

ところで、本学においては、**和歌山大学における SOGI（Sexual Orientation and Gender Identity）の多様性に関する対応ガイドライン**（2020 年 12 月 25 日／教育研究評議会による）が敷かれている。そこでは特に授業を遂行するにあたり下記の事柄が記述されている。

授業について（上から 3 項目を抜粋、アンダーラインと番号は著者による）

①授業（演習、実習を含む）において、性別で区別した活動は、特に必要な場合以外は行わないようにしてください。

②学生に対する呼称を男女で使い分けないでください。「さん」に、統一することを推奨します。

③授業では、その場にセクシュアルマイノリティがいることを前提として接し、差別的なニュアンスを持つ言葉やジェスチャーは使わないようにしてください。そして見た目や氏名でジェンダー・セクシュアリティを決めつけないようにしてください。

本授業は、本学における「SOGI の多様性に関する対応ガイドライン」に最大限に沿うことを念頭に置きながらも、第 1 回目授業では学生同士、さらに教員と学生の間で「自分がどのように呼ばれたいか（呼称）」を伝え合うアイスブレイクからスタートした。以後、変更の申し出はその都度受け付けることとし、基本的には学生自身が最も望む「呼ばれ方」を遵守した。ガイドラインに沿って呼称を、一律に「さん」に統一することを控えた意図は、見た目の性別にかかわらず、当人に望まれる呼称を通じてでさえ Gender Expression にかかわる自己表現の多様性が存在することへの気づきを促すことと、本授業では、学生によって表現される小さな一つ一つの個性や価値観が最大限に尊重される場づくりを実施していく授業者の意思を伝えるねらいもあった。

その他の授業づくりにおける主な工夫と、そのねらいは以下のとおりである。

第一に、90 分授業のうちの 20 分程度をその日の学びの振り返りのアウトプットに充てると同時に、その方法は、互いの解釈や考察の共通性と共に＜少しずつのズレ＞を等価に交換する「対話型」に依拠したことである。それらの営みを通して、同じ教室で学び合う「隣人」同士は、時に共感を示しながらも、他者の SOGIE は自己のそれと完全に重なることはない、「異質性」を当然視できることを意図した。

第二に、「対話」におけるグランド・ルールを人権の学びの一環として必ず事前に確認をしたこと（傾聴・尊重・対等・平等な時間のシェア・自己開示ラインを守る）である。

とくに「自己開示のラインを守る」ことには徹底して重きを置くことにより、学生の強いられることのない主体性に基づく自己語りと傾聴の場づくりへの貢献を見込んだ。

第三に、対話をした上での気づきをふりかえりシートに記して必ず提出することを課したことである。授業中に対話を介した振り返り場面では「語られなかった」ことや「思考するに至らなかったこと」が生じることを念頭に置いた。対話を交わす営みが他者理解の契機となるならば、事後のシート記入は異質な他者との出会いによって相対的な自己洞察を深める効果が生じると推察していたことに依る。

さらに、学生からは授業参画を通しての疑問や質問を受け付け、翌週の授業では、匿名によって適宜、教員コメントと共に紹介した。その際、教員自身も学生らと対等な関わりに立ち、自身が過去に経験した家族や SOGIE をめぐる社会的マイノリティ性を実感してきた経験を可能な限り開示した。学生同士に留まらず、教員と学生間との対話もまた「異質な他者理解」の契機となることを意図したものである。

第四に、SOGIE におけるマイノリティ当事者を、本授業の終盤に guest speaker として招き、インタビュー動画を教材化したことである。

その際、guest speaker は本研究の共同研究者でもありつつも、筆者が「親友」としての関わりを築いてきた人物として紹介した。事前に自己紹介動画の作成を依頼したが、「アロマンティック」や「ノンバイナリー」といった学生たちにとって馴染みの薄い概念を避け、「恋愛感情を持たない」「自分は男であるとか女であるかは決めていない」といったシンプルな説明によって易しい解説を施して貰った。セクシュアル・マイノリティのなかでも、さらに細分化された特性を持つ人も、決して理解不可能なとくべつな人ではなく、共存する「隣人」としての理解を無理なく受容し得ることを期待したものであった。

４．まとめ：授業実践における成果について

昨年度に抽出された本研究の主たる課題とは、①セクシュアル・マイノリティの人々が社会に存在している知識は獲得されても、身近に共存している認識までは促せなかったこと、②「多様な性・生き方」の学びによって、以後、自他尊重の関わりをいかに成熟させ得るかについて評価し得なかったことの 2 点であった。

本年度の実践ではこれらの課題を乗り越えるために大学授業内では、(1)安心の場づくりを徹底した「対話」の積み重ね、(2)授業後における「対話」の振り返り、(3)日常世界に存在する「隣人」として、セクシュアル・マイノリティ当事者との出会いの機会を創りだす、といった工夫をそれぞれのねらいを伴って施してきた。

「対話」の積み重ねと、その「対話」場面について授業後の振り返りを繰り返したことによる成果の一つは、『**学び手は、隣り合わせた他者との対話のなかに、共通性以外に、ささやかにも「異質性」を発見する時にはじめて、その相違が一体何によって説明されるかについて自己洞察を深め、他者理解へ辿りつこうとする**』ことの発見であった。

例えば、学生 A は、対話をした相手が「高校時に夢中になって取り組んでいた部活で大きく転倒して腹部をぶつけてしまったことがあった。その時に、先生から「女の子は将来子どもを産むのだから怪我には気を付けないといけない」と言われた時に何とも言えない嫌悪感が沸いてきた」と語った事を反芻し、「もしも、自分が同じように声かけをされても、あぁ、そうだなとしか思えなかったと思う。自分は女性として生まれたのだから出産する体を心配されるのも当然だと。」とふりかえった後、「SOGIE は人それぞれなので、見た目の性によって出産という性役割を押し付けられるような気持ちになる人がいる可能性について初めて考えるようになった」とコメントを残している。ここでは同じ教室で学びあう、隣人の間でこそ対話を重ね、相手との異質性を自覚することによって「性」や生き方をめぐる多様性が互いに見いだされていく、という成果が見られた。

また、授業内ではセクシュアル・マイノリティ当事者を招く以前に、安心の場における対話の積み重ねによって、自然発生的に自身の性自認の揺らぎを開示する学生たちも出現するに至った。その事実は日本人口の 1 割がセクシュアル・マイノリティュアルであるという統計的データを複数提示されることによる理解を伴いつつも、「我々は確かに共存している」という実感を促す成果へと繋がっていたと考察する。

それを傍証するのが guest speaker について募った学生による質問群であった。そこには、マイノリティ性にかかわる周囲へのカミングアウトや生きづらさについての質問群と全く等価に、好きな趣味、どのような人に好意を持つのか、将来の夢などを尋ねる質問群も存在した。同時に、学生たちからは日常を生きる上での悩みや、日頃感じている社会問題まで提示され、共に語りたいというメッセージも送られるという現象が生じた。

これらは「性的にマイノリティ性を持っている」ことは、（自身もそうであるように）多面性をもつ他者の個性の一つとして捉えられていたことに依ると考察された。つまり、授業で出会ってきた他者との関わりと同様に、日常世界の延長上に出会い、自身とは異なる特性を表現する人物についての関心から、その個性を知り理解したい、さらには自身の悩みをも開示しながらも関わりを築いてみたい、というかかわり欲求の表出と解釈できるものであった。

以上の大学教育における実践と成果のポイントは、特別支援学級ほかにおいて、いかにユニバーサルな汎用性を持つであろうか。＜わかる＞＜できる：自他尊重の関わりあいを築けること＞を促す「知識」と「経験」の両輪は、当然ながら教育現場において不可欠であることは間違いない。学び手の個別な価値観が形成されるバックグラウンドとなるのは個々の経験である。その経験による視座を拡大させる要件が新たな知識である。さらに、その知識を「実践」へと橋渡しする術とは、幾重にも重ねる日常世界で出会う隣人との「対話」とその振り返りであると言えるだろう。個々の経験の意味づけは、他者との幾度にも渡る「対話」を通して再構築され、変容を遂げる契機を獲得する。

本研究においては、いわゆるセクシュアルマイノリティ当事者との直接的な出会いが、＜わかる＞を後押しする大きな要件となるとの仮定が傍証されたが、自他尊重の関わりの基盤となるのは、日々日常的に出会う隣人（教室内で出会える人々）との対話の仕掛けをいかに育み得るかが今後、各教育現場の領域でさらに深く問われる課題と思われる。